

俳句雑誌『ホトトギス』と石井鶴三——石井鶴三宛高浜虚子書簡から

若松伸哉（愛媛大学教育学部）

はじめに

信州大学蔵石井鶴三関連資料から今回新たに三通の石井鶴三宛高浜虚子書簡が発見された。

石井鶴三は彫刻家として知られるが、著名な画家・石井柏亭を兄に持ち、鶴三自身も彫刻だけでなく、多くの絵画の仕事も残している。一方、高浜虚子は説明するまでもなく正岡子規の弟子として有名な俳人で、俳句雑誌『ホトトギス』を主宰し、発展させた人物でもある。この両者の最も大きな接点は、鶴三の手による虚子胸像の制作である。その胸像制作とは雑誌『ホトトギス』の五〇〇号（一九三八年四月号）を記念して企画されたものであり、『ホトトギス』五〇〇号記念号の座談会「虚子の胸像製作者たる石井鶴三を囲みて」での虚子の発言のなかに二人の交流の発端が語られている。

私は彫刻家と云われる人を余り沢山知って居ないので。其中で石井鶴三君は以前、一〇年許り前に東京日日、大阪毎日新聞で「日本新八景」を募った時分に席を同じうしたことがあって、其の時分から信頼して居ったのであります。其の後一、二回展覧会で作品を観たこともあり、また新聞紙上で挿絵を常に見て居りもし、それから又「東京繁昌記」という文章を日日新

聞紙上に掲げる時分に、私の「丸の内」という文章の挿絵を描いてもらったこともあるし、其の芸術に対する理解も多少出来ている処から、像を作るといふ話になるのならば石井君を煩し度いと考へついた次第であります。

虚子自身によるこの言葉によれば、一九二七（昭和二）年に東京日日・大阪毎日新聞が大々的に企画した「日本新八景」によつて二人は顔を合わせている。「日本新八景」は日本を代表する景勝地を一般投票をもとに選定する企画で、虚子と鶴三は同年六月にともにその選定委員になつている。当時の鶴三の印象を虚子は『虚子自伝』（一九五五・四、朝日新聞社）の「私の胸像」において次のように回想している。

毎日新聞で日本八景を募った時分に、私は花巻温泉や高田松原や木曾川等を社から依頼されたので見に行つた。鶴三氏は立山を見に行つた。さうして八景の選定に當つて氏は立山を推した。一部のものはそれに不賛成であつた。氏は断じて譲らなかつた。訥々として主張した。反対の声が起るたびに其の主張を繰り返した。遂に立山は八景の中に当選したやうに思ふ。

この鶴三の態度は虚子に強い印象を与えたようである。そしてこれも先の座談会で虚子が触れているが、「大東京繁昌記」における虚子「丸の内」の挿絵は鶴三が担当している。なお、虚子「丸の内」の連載は「日本新八景」と同年（一九二七年）の三月で、翌年の「大東京繁昌記」の単行本化に際しては鶴三の挿絵は掲載されていない。いずれにせよこれらの縁や鶴三の芸術に対する虚子の信頼もあって、虚子自身の指名による、『ホトトギス』五〇〇号を記念した胸像制作の依頼へとつながったようである。

鶴三と虚子のもう一つの大きな関わりは、虚子の死の直後に訪れている。一九五九（昭和34）年四月八日、虚子が八五歳で没すると、鶴三はそのデスマスク制作を手がけている。翌四月九日の鶴三の日記には次のような記述が見える。

夕方鎌倉高浜家三宅氏より電話デスマスクとつてくれぬか
との話 石川季彦氏に電話し同道ゆくこととし六・二〇発ゆく
七・三〇着八時少し過ぎからかかり九・三〇終る^②

鶴三は虚子の死の翌日にデスマスクの石膏をとるため鎌倉の虚子宅を訪れている。なお、デスマスクは同年四月一三日に出来上がり、完成した鶴三作の虚子デスマスクは『ホトトギス』一九六〇（昭和35）年四月号（「虚子一周忌特輯」）の口絵としても写真掲載されている。デスマスク制作という事実を見ても虚子やその周囲からの鶴三への信頼がうかがえる。

鶴三の兄・石井柏亭は、明治期の初期『ホトトギス』の頃から挿絵を寄せるなど、『ホトトギス』や虚子にとって重要な人物なのだが、弟の鶴三もまた、このように虚子の人生の節目を彩った重要な

関係人物といえることができる。

石井鶴三宛高浜虚子書簡三通・解題

さて、石井鶴三と高浜虚子の大きな接点を述べたが、本稿は今回確認された石井鶴三宛高浜虚子書簡三点を紹介することを目的としている。以下、それぞれについての内容および解題を掲げる。

1、石井鶴三宛高浜虚子書簡（仮番号「書6—94」）

書簡の内容については次の通り。

拜啓 愈々御清祥之段奉賀候

偕て御繁多の折柄寔に乍恐縮ホトトギス

三月号に口絵御執筆賜度御依頼申上

候 何卒御繰合せ御承諾賜り度懇願仕候。

期日は一月廿日頃までに御恵投願はれませ

れば幸甚に御座候。五色程度のものを希望

致し居り候間午勝手何分の御都合のほどお洩

し願度お待ち申上げ候 敬具

十二月十七日 高浜虚子

石井鶴三様

追伸

尚ほ御礼の儀は十円と定めてをりますので、此の点もお含み置き願ひ度く存じます。

書簡の宛先は「板橋区板橋町三ノ二六二／石井鶴三様」、消印がはつきり判読できず、年次は読み取れないが、日付は二月一七日。差出人は「東京市麹町区丸ノ内二丁目二番地／丸ノ内ビルディング八階八七六区／ホトトギス発行所／高浜虚子」となっている。

この書簡は『ホトトギス』三月号の口絵を依頼する内容となっており、次の「書6—96」と対になっている（詳しくは後段参照）。封筒の消印から年次が判読できないのだが、次の書簡との関連から判断すれば、本書簡の年次は一九四〇（昭15）年で間違いないと思われる。次の書簡を見てみたい。

2、石井鶴三宛高浜虚子書簡（仮番号「書6—96」）

御手紙難有拜見仕候、先般は口絵御恵投被下誠に難有存候。大変心地よき絵にて大に光彩を添へ候こと、存候。厚く御礼申上候。

又吟行僧 御氣に掛けられ、近々御着手被下候由、材料欠乏の折、御好意感謝仕候。決して急ぐことには無之候につき、御無理なさらぬやう願上候。

橙黄子はまことに気の毒のことを致し申候。三宅清三郎は神戸の安田銀行支店長として近々赴任、祝に明日は其送別句会有之候。御手紙明日持参し可申候。不取敢いろく御礼迄 匆々不一「改ページ」

二月四日

高浜虚子

石井鶴三様

令聞によろしく御鶴声願上候。

書簡の宛先は「板橋区板橋町三ノ二六二／石井鶴三様」、消印から日付が一九四一（昭16）年二月四日ということがわかる。差出人は「東京市麹町区丸ノ内二丁目二番地／丸ノ内ビルディング八階八七六区／ホトトギス発行所／高浜虚子」。

前書簡での依頼に応じて鶴三が描いた絵を受け取った虚子が感謝を述べる内容となっている。この二通のやりとりを裏付けるように、一九四一年三月号の『ホトトギス』に鶴三の口絵が使用されている（本稿末【写真①】参照）。ちなみに二月後の一九四一年五月号の『ホトトギス』口絵は兄の石井柏亭が描いている。

なお、本書簡に書かれている「橙黄子」は楠目橙黄子^{くすめとうこうし}を指している。また、同書簡中には「神戸の安田銀行支店長として近々赴任」する人物として「三宅清三郎」の名前も出ている。楠目橙黄子も三宅清三郎も『ホトトギス』同人。橙黄子は一八八九（明22）年高知県生まれで、建設会社間組^{はなぐみ}に勤め、朝鮮支店長や副社長などに任じられている。一九一五（大4）年以降、『ホトトギス』を通して虚子の指導を受け、一九二七（昭2）年には『ホトトギス』同人に推されている。しかし間組副社長在任中の一九四〇（昭15）年五月に肺炎のため病没している。「橙黄子はまことに気の毒のことを致し申候」との書簡の言葉は、その死について述べたものと思われる。

三宅清三郎は一八九八（明31）年岡山県生まれ、戦前は安田銀行を主とした安田関係行社に勤務し、戦後は銀座三楽堂という画廊を経営している。三宅は一九三二（大11）年より虚子門下となり、一九三二（昭7）年に『ホトトギス』同人となっている。

実は冒頭に述べた『ホトトギス』五〇〇号記念の虚子胸像制作企画の際、鶴三に直接依頼をしたのが、この楠目橙黄子と三宅清三郎

の兩名である（なお、虚子没後のデスマスクの依頼をしてきた「高浜家三宅氏」とはおそらく三宅清三郎を指している）。座談会「虚子の胸像製作者たる石井鶴三を囲みて」（前掲）では、「橙黄子・清三郎両君の石井さんに誠意を籠めて何等邪念無く懇願された結果、石井さんも忙しい中に実に気持良くお引請け下さった」との赤星水竹居きよの言葉があり、また同座談会では石井鶴三自身も「昨年の夏楠目さんと三宅さん時から、高浜先生の胸像を作って呉れまいかとのお話があった」と発言している^③。

鶴三の一九四一年二月三日の日記には「ホトトギス口絵画稿送る」^④とあるが、このときに添えたであろう鶴三の書簡は現時点で確認できていない。しかし、口絵の返礼となっている虚子の「書6—96」の内容を見る限り、虚子胸像依頼に際して交渉役を務めた楠目橙黄子の死について、鶴三は口絵に添えた手紙のなかで何らかの言葉を記したのではないかと想像される。

3、石井鶴三宛高浜虚子書簡（仮番号「高田馬場5—4」）

拝啓。久しく御無音仕候。私事目下表記のところに罷在候。

十六日頃上京、丸ビルのホトトギス発行所へ参る積りに候、併しすぐ又当地へ帰り候、

申かね候へどもホト、ギス表紙御揮毫の義願のこと相成

間敷哉。「目下 右傍挿入」僅に十六頁位のパンフレット程度のものを出し居り

候につき、前に厚い表紙をつけるわけに参らず、本文と共刷り

のものに有之候。菊一頁大のものに非ず、半頁位に願度候。

新聞の挿画のやうなものにて、俳人の顔を五六人見え坊で書いて頂

くのも面白いかと存候。併しそれは御考に任せ候。今月の末迄に願ふこと相成間敷哉。御多用とは存候へども折入つて奉願候「改ページ」

御諾否封中の葉書にて御一報奉願候。左の所に奉願候。

埼玉県北埼玉郡不動岡町、岡安迷子方

ホトトギス仮事務所

奥様によりしく奉願候、敬具

十月八日

高浜虚子

石井鶴三様

本書簡は封筒は残っておらず、便箋のみである。したがって消印等から年次を確認することはできない。しかしその内容は鶴三に対して『ホトトギス』表紙絵を依頼する文面となっており、一九四六（昭21）年の『ホトトギス』一〜一二月号が鶴三の絵を表紙に使用していることから考えれば、本書簡が書かれたのは一九四五（昭20）年だと推測できる。このとき虚子は疎開により生活の拠点を長野県小諸に移している（一九四四〜一九四七年）。

太平洋戦争末期の物資欠乏の状況を受けてと考えられるが、『ホトトギス』は一九四五年四月号から一二月号（六〜九月号は休刊）にかけてどれも表紙絵もなく約一六頁の編集となっており、書簡中にある「僅に十六頁位のパンフレット程度のものを出し居り」の言葉とも一致する。また、同年の『ホトトギス』一〇〜一二月号には「社告」として、郵便物等は「埼玉県北埼玉郡不動岡町岡安迷子方」の「ホト、ギス仮事務所」に送って欲しい旨が掲載されており、書簡中に記される返事の送り先（岡安迷子方^{おかやすめいし}）と一致する。これらの

点も、本書簡の執筆年次が一九四五年であることの裏付けとなる。

なお、虚子書簡には「俳人の顔を五六人見え坊で書いて頂くのも面白いか」と具体的な注文が記されているが、実際に使われている表紙絵はタイトルが「南天」であり（本稿末【写真②】参照）、虚子の提言は採用されなかったようである。

すでに述べたように、この書簡での依頼に応じた鶴三の表紙絵は一九四六年の『ホトトギス』一月号から十一月号まで使用されるが、一二月号は兄・石井柏亭の表紙絵に変わっている。『ホトトギス』一九四六年一二月号は六〇〇号記念号となっており、『ホトトギス』との関係で言えば、鶴三より縁の深い柏亭が描く表紙絵のほうが記念号としてふさわしいという判断が働いたのかもしれない。

さて、以上のように『ホトトギス』の戦後の出版に際して鶴三がその表紙を描いたわけだが、実は鶴三は同時期の他雑誌の表紙も手がけている。たとえば敗戦直後の文芸雑誌として著名な『人間』（川端康成らによって一九四六年一月創刊。創刊号には虚子も俳句を寄稿）の一九四六年七月一二月号の表紙には鶴三の絵が使用されており、また光文社の総合雑誌『光』（一九四五年一〇月創刊）の創刊号から一九四六年八月（一九四五年十一月号は除く）までの表紙にも鶴三の絵が使用されている。敗戦直後は雑誌が簇生した時期ということもあるが、日本全体が復興に向けて歩み出した時代のなかで、再出発した『ホトトギス』だけではなく、これらの新しい雑誌の表紙を鶴三の絵が飾っていた事実も指摘しておく。

おわりに

石井鶴三が『ホトトギス』に絵を提供しているのは、本稿で触れ

た一九四一（昭16）年三月号の口絵と、一九四六年一〜十一月号の表紙絵の二回だけである。今回発見された書簡三通はいずれもその二回の絵の提供に関わっており、その点で貴重な資料である。

本稿では答える準備もないまま、虚子に関わって本書簡が提起する問題について最後に簡単に述べておきたい。

『ホトトギス』掲載の絵について虚子が直接依頼している書簡は管見の限りほとんど無いが、今回の「書6-94」に見られる「五色程度のものを希望致し居り」という要望や、「高田馬場5-4」の「俳人の顔を五六人見え坊で書いて頂く」との提案が示すように、虚子のなかに『ホトトギス』掲載の絵についてそれなりのイメージがあったことが推察される。虚子が雑誌『ホトトギス』を広く普及させた人物であることは言うまでもないが、そのメディアとしての戦略のなかにこうした絵画という要素も想定していく必要があるだろう。小さいながらもこれらの書簡は雑誌運営者としての高浜虚子の新たな姿をさぐる手がかりになるかもしれない。

注

- (1) 引用は『石井鶴三全集』第七卷（一九八七・五、形象社）より。
- (2) 『石井鶴三日記』第四卷（二〇〇五・三、形文社）。
- (3) 注（1）に同じ。
- (4) 『石井鶴三日記』第二卷（二〇〇五・三、形文社）。

付記

本稿で紹介した書簡の翻字は荒井真理亜氏・高野奈保氏・多田蔵人氏・出口智之氏の各諸氏によるもの（文責は若松が負う）。また、『ホトトギス』の調査に関しては愛媛大学の柿原和宏氏の協力を得た。記して謝意を表したい。



【写真①】『ホトトギス』一九四一年三月号口絵（タイトル「早春」）



【写真②】『ホトトギス』一九四六年一月号表紙（タイトル「南天」）